

~~~~~  
 研 究  
 ~~~~~

## 妊娠期から生後1年までの児に対する母親の愛着と その経時的变化に影響する要因

大村 典子<sup>1)</sup>, 光岡 攝子<sup>2)</sup>

### 〔論文要旨〕

周産期において母親が抱く児への愛着感情の変化を知ることを目的とし、妊娠期の愛着と生後3か月、生後1年における乳児への愛着との関連、および愛着の経時的变化に影響する要因について検討した。

愛着に影響する要因として、母親のイライラ感や育児不安、心配事などは妊娠期から産後のどの時期においても児への愛着に関連しにくいことが示唆された。一方、産後に育児の楽しさ、子育てを通しての幸せ感を感じている母親は乳児への愛着が有意に高かった。

また、妊娠期の愛着得点と生後3か月、1年の乳児への愛着得点との間に有意な関連が認められたが、相関の程度は中等度であり、妊娠期の愛着は生後の愛着と関連をもっているものの、生後の愛着に影響する他の要因が多くあるといえる。

経時的な変化について、愛着得点は妊娠期から生後3か月にかけ、有意に高まり、その後1年まで一定のレベルを保っていた。妊娠期から生後3か月にかけて愛着が上昇する群は、経産婦、妊娠を希望した母親、妊娠中の不安が少ない母親、生後3か月に育児不安を持たない母親、母乳栄養の母親群であった。

これらのことから、特に初産婦や妊娠を希望しなかった母親、育児不安をもつ母親においては、生後3か月の時期は、愛着形成の危機に陥りやすい時であり、母親が抱く児への愛着感情は一時期の愛着の強さのみならず、長期的な安定性をとらえていくことの必要性が示唆された。

**Key words** : 胎児への愛着, 乳児への愛着, 愛着形成, 縦断調査

### I. はじめに

母と子の愛着形成において、出生直後の新生児との接触が母親の心に非常に強い影響を及ぼす、いわゆる感受期が存在することは古くから知られている。しかし、女性はすでに妊娠中から母親らしい感情や、胎内のわが子への愛着を抱いており、また、その形成の大部分は出産後、たゆみなく繰り返される日常の養育行動を通して、母と子がお互いの反応や愛情を喚起しあう

関係性の中で築かれていく発達のプロセスである。女性が子どもへの愛着を育みながら、母親としての役割を獲得し、健全な母子関係を形成していくために、出産後の一時期のみならず、妊娠期から乳児期、幼児期を経た育児期にかけ長期的視野にたった支援が求められている。

妊娠中の胎児への愛着と出産後の乳児への愛着との間に関連があることはすでにいくつかの研究において報告されている<sup>1)~3)</sup>。しかし、その多くは、妊娠期から産後1か月頃までの追跡

Prenatal and Postnatal Attachment of Mother to Her Child and Factors Affecting Longitudinal Change of the Attachment  
 Noriko OHMURA, Setsuko MITSUOKA

[1801]

受付 06. 1.16

採用 06. 9.12

1) 鳥根大学医学部看護学科 (助産師) 2) 前 鳥根大学医学部看護学科 (保健師)

別刷請求先: 大村典子 鳥根大学医学部看護学科 〒693-8501 鳥根県出雲市塩冶町89-1

Tel/Fax : 0853-20-2339

や、妊娠期の愛着感情と産後の母性行動との関連であり、母親の愛着感情に焦点をあて、長期縦断調査を実施したものは少ない。

また、母親の愛着形成に影響を与える要因についても、妊娠中は在胎週数や胎動初覚によって母親の愛着感情が高まることが証明されているものの<sup>4)</sup>、妊娠期から産後にかけての経時的な愛着の変化やそれに影響を及ぼす要因については、まだ十分明らかにされていない。

本調査の目的は、妊娠期の胎児への愛着と生後3か月、1年までの乳児への愛着の経時的变化を知ること、および、その期間の母子の愛着の変化に影響を与える要因を探ることである。

## II. 研究方法

### 対象と方法

妊婦定期健康診査のために産科外来を訪れた妊婦を対象に、研究の目的・方法などを説明し、縦断調査への協力を求めた。同意の得られた妊婦には研究依頼書に住所・氏名を記入してもらったうえ、郵送法によって質問紙の送付・回収を行った。調査時期は、妊娠期と生後3か月、および生後1年の時点である。縦断調査における各時期のデータのマッチングは母親の生年月日と出産予定日をコード化した番号によって行

い、回答された調査表への記名は対象者の自由とした。個人情報の漏洩防止に努め、住所、氏名は、出産1年後の調査表を送付した時点で処分した。

調査内容は、母親の属性や背景に関する基礎情報と妊娠期や育児期の様子についての質問紙、および児への愛着である。児への愛着は筆者らが独自に作成した10項目の質問(表1)の合計得点によって測定した。妊娠期と産後では対象が胎児から乳児に変化するため、質問内容の表現は対象児にあわせ修正したが、質問の意図や項目数は変えないように配慮している。調査期間は、平成14年11月から平成16年5月である。

分析にはSPSS11.0を用い、愛着得点の平均値の差の検定にはt検定と分散分析、愛着の各時期における関連については積率相関係数、愛着得点の経時的な比較には対応サンプルにおけるt検定を用いた。

## III. 結果

### 1. 対象者の背景

妊娠期から生後1年までの縦断的研究に協力の意思が得られた52名の妊婦を調査対象とした。そのうち3つの時期がすべてそろった有効

表1 妊娠期および生後の愛着質問紙

No	妊娠期の愛着	No	生後の愛着
1	妊娠したことがとてもうれしい	1	出産したことがとてもうれしい
2	胎動を感じるとうれしくなる(胎動を感じる時が楽しみだ)	2	赤ちゃんの世話をすることが楽しい
3	早く赤ちゃんに会いたい	3	いつも赤ちゃんと一緒にいたい
4	赤ちゃんのためになることをいつも心がけている	4	赤ちゃんのためになることをいつも心がけている
5	お腹の赤ちゃんを愛しく思う	5	赤ちゃんを愛しく思う
6	お腹をやさしくなでてあげる	6	赤ちゃんをやさしく抱いたり、なでてあげる
7	超音波で赤ちゃんのようすを見るのが楽しみだ	7	赤ちゃんの表情やしぐさを見るのが楽しい
8	お腹の赤ちゃんのおかげで私はとても幸せだ	8	赤ちゃんのおかげで私はとても幸せだ
9	お腹の赤ちゃんに話しかける(話しかけたくなる)	9	赤ちゃんに話しかける
10	赤ちゃんの顔を思い浮かべる	10	離れている時も、赤ちゃんのことを思い浮かべる

回答者数は37名である。対象者の平均年齢は29.51歳 (SD=4.2), 平均妊娠週数は30.38週 (SD=7.5) であった。妊娠歴は, 初産婦が19名 (51.4%), 職業の有無においては, 有職妊婦18名 (48.6%), 現在の家族形態は, 核家族が24名 (64.9%) であった。また, 対象者の分娩様式は帝王切開分娩が9名 (24.3%) 含まれているが, すべて正常産で健常児を得ている。栄養法は母乳栄養が28名 (75.7%) である。育児不安の有無については, 生後3か月の時点で育児不安をもつ母親が, 14名 (37.8%) あったが, これらの母親の初経割合に有意差はなかった。

妊娠期, 生後3か月, 生後1年時において愛着を測定した10項目の信頼性係数は, それぞれCronbach's  $\alpha = 0.859$ ,  $\alpha = 0.844$ ,  $\alpha = 0.774$  であった。

**2. 母親の背景別にみた各時期における児への愛着**

最初に, 妊娠期と生後3か月, 生後1年の児への愛着の概観を知るために, 母親の背景別に各時期の愛着得点を求めた (表2)。母親の職業別にみると, 妊娠期においては有職妊婦のほうが無職妊婦に比べ, 胎児への愛着得点が有意に高かったが, 出生後にこの差は認めなくなった。初産経産別, 妊娠の希望の有無別に各時期の児への愛着得点に有意差はなかった。

育児に関する項目として, 育児が楽しいかど

うか, および育児に幸せを感じるかどうかという質問に対しては, 生後3か月, 生後1年の時点ともに, 「とても楽しい」, 「たびたび幸せを感じる」と回答した母親の愛着得点がそうでない母親の愛着得点を有意に上回った。育児不安の有無については, 生後3か月の時点で育児不安をもつ母親は, 育児不安をもたない母親に比べ愛着得点が低い傾向が認められるものの有意な差はなかった。

各時期における母親のイライラ感の有無, 相談相手の有無, 育児援助者の有無別にみた児への愛着得点に有意差は認められなかった。

**3. 妊娠期の愛着と生後の愛着との関連**

各時期における愛着得点の相関は表3に示す。全体では妊娠期の愛着と生後3か月の愛着との間に有意な関連 ( $r=0.538$ ,  $p<0.01$ ), および妊娠期の愛着と生後1年の愛着との間に有意な関連 ( $r=0.670$ ,  $p=0.01$ ) が認められた。

この関連を初経産別に検討すると, 経産婦においては各時期の愛着に一定の相関が認められるものの, 初産婦においては, 妊娠期の愛着と生後3か月時点での愛着との間に関連を認めなかった。しかし, 初産婦も妊娠期と生後1年との間には再び関連が認められた。妊娠希望の有無においては, 積極的に妊娠を希望した母親は妊娠期の愛着と生後の愛着に相関を認めるが, 積極的に希望していなかった母親では, 妊娠期

表2 各時期における母親の背景別愛着得点

	妊娠期			産後3か月			産後1年		
	n	愛着得点	SD	n	愛着得点	SD	n	愛着得点	SD
全体	37	42.81	(5.2)	37	45.42	(3.7)	37	45.22	(3.3)
職業あり	18	44.94	(3.7)	19	45.72	(3.4)	20	45.89	(2.7)
職業なし	19	40.79	(5.8)	24	45.13	(4.1)	22	44.58	(3.7)
育児とても楽しい				19	47.34	(2.2)	20	47.10	(2.2)
育児時々楽しい				15	43.87	(3.5)	15	43.47	(2.8)
どちらでもない				3	41.00	(6.6)	2	39.50	(0.7)
育児幸せ感多い				31	46.66	(2.5)	33	45.94	(2.7)
たまに感じる				6	39.00	(2.4)	4	39.29	(0.5)
育児不安あり				14	43.79	(4.6)	17	44.40	(3.3)
育児不安なし				23	46.41	(2.7)	24	45.81	(3.3)

\* $p<0.05$  \*\* $p<0.01$  \*\*\* $p<0.001$

と生後3か月の愛着との間に有意な相関はなかった。妊娠中に心配事があった母親、生後3か月の時点で育児不安をもつ母親も同様の傾向を示した。

#### 4. 妊娠期から生後1年までの愛着の経時的変化とその要因

各時期における児への愛着得点は妊娠期

表3 妊娠期の愛着と生後3か月、生後1年の愛着との相関係数

妊娠期	産後3か月		産後1年	
全体	0.538	**	0.670	**
初産婦	0.384	n.s	0.767	***
経産婦	0.748	***	0.629	**
妊娠希望あり	0.532	**	0.647	***
妊娠希望なし	0.519	n.s	0.747	**
妊娠中の心配事あり	0.213	n.s	0.682	**
妊娠中の心配事なし	0.893	***	0.631	**
育児不安あり	0.510	n.s	0.771	**
育児不安なし	0.512	*	0.601	**

\* $p < 0.05$  \*\* $p < 0.01$  \*\*\* $p < 0.001$

42.81 (SD=5.2), 生後3か月45.42 (SD=3.7), 生後1年45.22 (SD=3.3)であった。対応サンプルにおける平均値の差の検定を行ったところ、妊娠期の愛着に比べ、生後3か月の愛着は、有意に上昇していた ( $p < 0.01$ )。生後3か月と生後1年では有意な変化はみられなかった。

愛着得点の経時的変化を母親の背景別に検討すると、経産婦、積極的に妊娠を希望した母親、妊娠中に心配事のなかった母親、母乳栄養の母親は、妊娠期から生後3か月にかけ愛着得点に有意に上昇するが、初産婦、妊娠を希望していなかった母親、妊娠中に心配事があった母親、育児不安を抱えている母親、育児の楽しさや幸せ感を感じられない母親群は、妊娠期から生後3か月にかけての愛着得点に有意な上昇を示さないことがわかった (表4)。

#### IV. 考 察

##### 1. 妊娠期の愛着と産後の愛着との関連

妊娠期から生後1年までの縦断調査において、母親が妊娠期に抱く胎児への愛着は生後3か月、および生後1年における乳児への愛着と関連することが確かめられた。

表4 愛着得点の経時的変化

	n	愛着得点 (SD)			検定	
		妊娠期	生後3か月	生後1年	妊娠期と3か月	妊娠期と1年
全体	37	42.81 (5.2)	45.42 (3.7)	45.22 (3.3)	**	**
初産婦	19	43.00 (4.9)	44.63 (3.9)	44.63 (3.0)	n.s	*
経産婦	18	42.61 (5.7)	46.25 (3.5)	45.83 (3.5)	**	**
妊娠希望あり	25	43.72 (4.2)	45.78 (3.3)	45.28 (3.1)	*	*
希望なし	12	40.92 (6.8)	44.67 (4.7)	45.08 (3.7)	n.s	*
妊娠中心心配事あり	18	41.72 (5.1)	44.39 (4.2)	44.22 (2.9)	n.s	*
妊娠中心心配事なし	19	43.84 (5.3)	46.39 (3.1)	46.16 (3.4)	**	*
育児不安あり(3か月)	14	41.43 (6.0)	43.79 (4.6)	43.64 (2.8)	n.s	n.s
育児不安なし(3か月)	23	43.65 (4.6)	46.41 (2.8)	46.17 (3.3)	**	**
育児とても楽しい	19	44.53 (4.6)	47.34 (2.2)	47.05 (2.2)	**	*
どちらでもない	3	40.00 (2.6)	41.00 (6.6)	43.00 (4.4)	n.s	n.s
育児幸せ感たびたび	31	43.71 (4.5)	46.66 (2.5)	45.90 (3.0)	***	**
どちらでもない	6	38.17 (2.6)	39.00 (6.6)	41.67 (4.4)	n.s	n.s
母乳栄養	28	43.07 (4.6)	45.50 (3.7)	45.36 (3.3)	**	**
混合・人工栄養	9	42.00 (7.1)	45.17 (4.1)	44.78 (3.4)	n.s	n.s

\* $p < 0.05$  \*\* $p < 0.01$

妊娠期の愛着と生後1か月の新生児への愛着は、Müller<sup>1)</sup>がPrenatal Attachment Inventory(以下PAI)およびMaternal Attachment Inventory(以下MAI)を用いて $r=0.4$ 、その日本語版を用いて辻野ら<sup>2)</sup>が $r=0.515$ 、佐藤<sup>3)</sup>が $r=0.440$ と報告している。今回は、妊娠期と生後3か月が $r=0.538$ 、妊娠期と生後1年では $r=0.670$ という結果であった。この結果は、妊娠期の愛着と生後1か月の新生児への愛着との間の関連を見出した先述の研究を支持し、さらに、妊娠期の愛着は新生児期のみならず、生後3か月および1年を経過した乳児への愛着とも関連していることを示している。しかし、相関の程度としては中等度の関連であり、妊娠期に将来の母子関係を予測することにおいては、妊娠期の愛着得点も大いに関連するものの、それだけでは十分な予測はできないこと、他にも出産時やその後の多くの要因が愛着形成に影響していることを示している。

また、妊娠期と生後3か月における相関よりも、時間を経た妊娠期と生後1年との間の相関のほうがやや高い傾向にあった。この理由については、初産婦や妊娠を希望していなかった母親、妊娠中に心配事のあった母親、生後3か月に育児不安の出現した母親など、妊娠期の愛着と生後3か月の愛着との間に相関を示さない母親群が存在したことが一因にある。例えば初産婦と経産婦を比べると、経産婦においては育児への慣れや余裕から各時期の愛着が一定しているが、初産婦においては、妊娠期に想像していた乳児像や育児イメージと現実の育児負担とのギャップが愛着得点に反映し相関を失っていることが考えられる。これらのことより、生後3か月の時期における愛着の不安定さを推測することができる。児への愛着はさまざまな要因に影響されながら、常に流動する可能性を持っているものと考えられ、母子間の愛着関係を論じる際、Bowlby<sup>6)</sup>が述べるように一時期の愛着の強さと同時に、愛着の時間的な安定性がより重要な意味をもってくるものと思われる。

なお、本調査で得られた相関係数は、調査時期の時間的スパンが長いことを考慮すると先述の辻野ら<sup>2)</sup>や佐藤<sup>3)</sup>の報告より幾分高いと思われる。これは本調査で用いた測定尺度は、

PAI, MAIに比べ項目数、表現ともに、妊娠期と生後の‘対応’をより意識したものであることが影響していると思われる。

## 2. 愛着の経時的变化とその要因

### 1) 愛着の経時的变化

母親が抱く児への愛着は、妊娠期から生後3か月にかけて有意に上昇し、その後1年まで一定のレベルを保つことが確かめられた。

出産と対児感情の変化について、辻野らはPAIおよびMAI日本語版を用い、妊娠期の愛着の平均点は55.9であったのが、生後1か月の愛着の平均点は101.8に上昇すること、また、妊娠期の愛着得点はほぼ正規分布しているが、産後の愛着得点は高値へ偏移することを報告している<sup>2)</sup>。PAI尺度(24項目)とMAI尺度(26項目)の項目数の違いを考慮したとしても、この結果から妊娠期から生後1か月の時期にかけ、児への愛着得点が増していることがうかがえる。本調査も辻野らの結果を支持し、さらに出産をきっかけに上昇した児への愛着が、その後1年まで、比較的安定した一定のレベルを保つことを示していると考えられる。

### 2) 愛着の経時的变化に影響する要因

愛着得点が増える要因について、初産婦、妊娠を希望していなかった母親、妊娠中に心配事があった母親、生後3か月時に育児不安を抱えている母親、非母乳栄養の母親、育児の楽しさや幸せ感を感じていない母親群は、妊娠期から生後3か月にかけて愛着得点が増える傾向を示さないことがわかった。

この理由として、初産婦は経産婦に比べ産後の育児に慣れる時期が平均6.3か月と有意に遅延すること、また、対児感情不良群において育児に慣れる時期が遅いことが指摘されており<sup>5)</sup>、この時期の初産婦の育児に対するとまどいや負担感が愛着得点の上昇を抑制していることが予想される。しかし、生後1年までの間には、愛着得点が増え経産婦と同様のレベルとなっていることから、初産婦にとっては出産直後の数か月間は愛着がゆらぎやすい危機的な時期であること、愛着形成について、母親の育児への適応を考慮すると、特に初産婦においては3か月よりも長い視点でみていく必要があるこ

とが示唆される。

妊娠の希望の有無別にみると、積極的に妊娠を希望した群は、出産後愛着得点が有意に上昇し、かつ各時期における愛着に関連を認めるが、積極的に妊娠を希望していなかった群にはその関連性を認めず、また、生後3か月にかけても愛着得点が増えないことがわかった。産褥入院中の母親を対象にした阿南<sup>7)</sup>の調査においても、希望した妊娠でなかった人は対児感情のうち、回避感情や拮抗感情が有意に高いことが指摘されており、本調査結果を支持しているものと思われる。また、この群は妊娠期と生後3か月の愛着との間に相関をもたなかったことから、産後に愛着得点が増える母親もいる反面、愛着が高まらない、あるいは低下する母親が含まれている可能性があるといえる。つまり、妊娠を積極的に希望していない母親に関しては、妊娠期の愛着得点から産後の母子関係が予測しにくいということができ、妊娠期の過ごし方や状況、出産後のサポートの質によって、児への愛着形成が左右される可能性を示している。

育児に関連する要因として、育児不安の有無については、不安を持たない母親は妊娠期に比べ生後3か月の愛着得点が有意な経時的上昇を示すが、育児不安をもつ母親は上昇しないことがわかった。しかしこの2群間で生後3か月の愛着得点を比較した場合、育児不安をもつ母親の愛着得点は低い傾向にあったが、有意ではなかった。

一方、生後3か月、1年ともに、育児に楽しみや幸せを感じている母親は愛着得点が経時的に有意に上昇するとともに、育児の楽しみや幸せを感じない母親群に比較し、児への愛着得点が増え高かった。佐藤<sup>8)</sup>は、出産後1か月における母親の愛着感情は、母親の育児態度のうち育児の楽しさに対してのみ影響力をもち、育児の苦しさ、心配・困惑・不適格感などネガティブな感情に対する影響力はもたないことを指摘している。本調査においても、産後3ヶ月、1年の時点で、育児不安やイライラ感といった否定的・消極的感情の有無による愛着得点の差はなく、育児の楽しみや幸せ感といった感情が愛着得点に有意差をもたらしていたことは、佐藤の結果を支持するものであると考えられる。

反面、経時的変化を追っていくと、育児不安を抱えている状況は愛着感情の高揚を抑制している可能性が示され、ある一時点における愛着感情には、育児の楽しさや幸せ感といった積極的な感情が大きく影響するが、母子の親和の深まりや関係性の発達という長期的な側面に着目すると育児不安を抱えていることは、母親の愛着感情に否定的な影響を与えることが示唆された。

児への栄養法と愛着との関連においては、笹野<sup>9)</sup>が、3か月児をもつ母親を対象に母乳栄養を行っている人比べ混合・人工栄養を行っている人は児への愛着のうち「児との楽しみ」が増え低かったことを報告している。これらのことより、授乳行動を通してなされる児との直接的なふれあいも、母親の愛着を高める一因であることが推測される。

最後に、本調査は、妊娠期から産後1年にわたる縦断調査であるが、すべての時期にデータの得られた対象者が少ないこと、愛着の測定に関し、独自に作成した質問紙を用いたため、他の所見と比較ができないことなどの課題がある。今後これらの課題をふまえ、長期的調査を重ねていく必要がある。

## V. ま と め

- 1) 母親が妊娠期に抱く胎児への愛着は、生後3か月および生後1年の乳児への愛着と有意に関連していた。
- 2) 児への愛着得点は、妊娠期から生後3か月にかけて有意な経時的上昇を示し、その後、1年まで一定のレベルを保っていた。
- 3) 初産婦、妊娠を積極的に希望していなかった母親、妊娠中に心配事のあった母親、生後3か月時に育児不安をもつ母親群は、妊娠期から生後3か月にかけて、愛着得点の上昇を示さず、かつ、この2時点の間に関連性ももたなかった。これらの群にとって、生後3か月までの頃は育児に余裕がもてない時期、愛着形成において危機的な時期であり、育児への適応を考えた長期的視点でかかわっていく必要性が示唆された。

## 謝 辞

育児期のお忙しい中、長期間にわたり調査にご協力いただきましたお母様方に心より感謝申し上げます。

なお、本調査は平成14～16年度文部科学省研究補助金の助成を受けて行ったものの一部である。

## 文 献

- 1) Muller M. E. Prenatal and postnatal attachment : A modest correlation, J. Obstet. Gynecol. Neonat. Nurs. 1996 ; 25 : 161-166.
- 2) 辻野順子, 雄山真弓, 乾原 正, 他1名. 母親の胎児及び新生児への愛着の関連性と愛着に及ぼす要因—知識発見法による分析—. 母性衛生 2000 ; 41 (2) : 326-335.
- 3) 佐藤里織. 初妊婦における胎児に対する attachment が新生児に対する attachment に及ぼす影響—妊娠初期から出産後1ヶ月までの縦断的研究—. 日本看護学会誌 2004 ; 24 (3) : 72-80.
- 4) 成田 伸, 前原澄子. 母親の胎児への愛着形成に関する研究. 日本看護学会誌 1993 ; 13 (2) : 144-147.
- 5) 我部山キヨ子. 産後の育児に関する研究—育児適応を促進する因子・遅延する因子—. 母性衛生 2002 ; 43 (2) : 314-320.
- 6) Bowlby. 二木武監訳. 母と子のアタッチメント, 心の安全基地. 東京 : 医歯薬出版株式会社, 1996 ; 161-165.
- 7) 阿南あゆみ, 竹山ゆみ子, 永松有紀, 他. 対児感情に影響を及ぼす要因の検討—産後入院中の母親の質問紙調査から—. 産業医科大学雑誌 2005 ; 27 (4) : 385-393.
- 8) 佐藤里織. 妊娠期および出産後における Maternal Attachment と母親の育児態度との関連—妊娠初期から出産後18か月までの縦断研究—. 小児保健研究 2005 ; 64 (3) : 507-514.
- 9) 笹野京子, 炭谷靖子. 3ヶ月児をもつ母親の愛着と哺乳形態に関連する要因の検討. 富山医科大学看護学会誌 2005 ; 6 (1) : 111-121.